京都（↓Web）「ヲシテ講習会」　92回目　令和5年8月19日（2023）　池田 満

「イセのミヤ」（伊勢神宮）の再興がはたされます。

イクメのキミ（垂仁天皇）の御代に至って、すでに「イセのミヤ」は朽ち果てていたのでした。旧跡も良く解らずじまい、草ぼうぼう樹木も鬱蒼とした雰囲気でした。

さて、イセのミヤのカミヨの終わり頃、ヒトの世の初めの頃のことは、28と30アヤにありました。

カスガカミすなわちアマノコヤネの住まいしていたのは何処だったのでしょうか？イサワとウチ、そしてヤマタ、どのぐらいに区別を付けていたのでしょうか？

草ぼうぼうになったのは、28アヤのアスの初めの頃から、ヤマトヒメの時代に至る、700年の間の変化ですね。もう分らなかったのでした。通常の地質の積み重なりは、1年で1mmですから、10年で1cm。70年で7cm。700年だと70cmです。当時でさえ、地下70cmのところに埋まっていたわけです。ヤマトヒメさんも良く解らなかったのも、無理はありません。

36アヤ、ヤマトヒメ カミしつむ　アヤ

（11代垂仁天皇の3分割のふたつめ）

9年36－1　イクメのキミ（垂仁天皇）は、タマキミヤ（奈良県桜井市）にミヤコ（首都）をお開きになりました。

それから9年のことです。アススの697年、ナツキ（秋の7月）16日。カハイ・ツキヒメさんをおキサキさん（正皇后）にたてられました。

ツキヒメさんはユメ（夢）を見られましたのでした。そのユメには、ヤマトオオクニカミ（2代目オオモノヌシ・クシヒコ）から、ツキヒメさんは、シテ（幣・シデ）を貰い受けるのでした。

そうしますと、身籠られましたのですが、臨月になっても産まれず、病（やま）いになられました。ようやく三年の後のナツキ（9月）16日に産まれたヒメミコ（皇女）は、ヤマトヒメと名付けられました。産後、ツキヒメさんは病気の悪化でお亡くなりになります。12年（アスス700年）カナツキ（10月）2日の事でした。ツツキ・カハヰのツキのカミとして、嘆き祭るのでした。（樺井月神社、城陽市水主宮馬場）

Ⓜ（みつるナビ）　サホヒメの遺言で（35－29）タニハミチウシの娘さんをおキサキに。とありましたのを、反故になさったか？　ツツキ（綴喜郡）のカハイのツキヒメさまをおキサキ（正皇后）となさいました。それで、お生れになったのがヤマトヒメです。ツキヒメさまは、早世されてしまわれます。半月ほどで。記紀はこの記述を抹消していました。でも、神社はちゃんとお祭りされて、樺井月神社（『延喜式』の「神名帳」に記載あり）として残っていました。

36-2　（ツキミチテ　ミトセノチ　ナツキソムカニ　カバキツキヒメ）〈35－31参照〉

36-3　（ハ、マカル　ツギキカバキノ　ツキノカミ　ナケキマツリテ）

267〈垂仁天皇 9〉

267 第四日倭姫命（よはしらを、まつす、やまとひめのみこと、）。

186（221）氷羽州比賣命（ひばすひめのみこと）

〈36－4参照〉

（223）次倭比賣命（つぎにやまとひめのみこと）。

南山城といえば、美人のカマハタトヘさんを思い出します。（ホ37－26・27）ヒハスヒメのお亡くなり（アスス720年）のあと、ツキヒメさんがキサキとなって（アスス722年）生まれた皇子のイワツクワケの子孫に26代の継体天皇がお出になられます。

36－3　15年（アスス703年）キサラキ（2月）モチ（満月）に、おキサキを招きました。乱でお亡くなりになられたサホヒメさんの、遺言の通りの、タニハミチヌシの娘さんを、おキサキさん

にと、お決めになられるのでした。長女のヒハスヒメを始め5人の娘さんが到着します。ヒハスヒメ、ヌハタリイリヒメ、マトノヒメ、アサミニイリヒメ、タケノヒメでした。ハツキ（8月）のハツヒ（1日）にヒハスヒメをキサキ（正皇后）に立てられました。ヌハタリイリヒメ、マトノヒメ、アサミニイリヒメは、スケキサキとウチメに入内なさいますが、残るタケノヒメは親元に帰されたのでした。帰路の途中で、タケノヒメさんは恥ずかしさの余り、コシ（御輿）から、落下して亡くなってしまわれまして、そこの国をオチクニ（堕国・乙訓、京都府向日市・長岡京市の付近）と呼ばれます。

36-5　18年（アスス706年）サツキ（3月）10日に、ヒハスヒメさんがミコ（皇子）のニシキイリヒコさんをお産みになりました。イムナ（実名）はヰソサチさんと言われます。

36-6　20年（アスス708年）のマフユ（真冬）、ヒハスヒメさんはまたミコ（皇子）のヤマトヲシロワケ（後の景行天皇、タリヒコ）をお産みになりました。次にはオオナカヒメと、ワカキニ（ハルヒコ）もお産みになります。

スケ・キサキのヌハタニイリヒメ（二女）さんは、ヌテシワケさんと、イカタラシヒメをお産みになります。

アサミニイリヒメ（三女）は、イケハヤワケと、アサツヒメをお産みになりました。

36-8　23年（アスス711年）ナツキ（9月）ツミヱ（3）が1日で、2日の日（ツミト）にミコトノリをおっしゃいます。

「ミコのホンツワケ（サホヒメさんの忘れ形見。22歳）の事ですが、心配をしています。　ヒケ（髭・ひげ）が生えてイサチ（勇み立ち）ているのに、モノも言わずにいます。これは、何ゆえであるか」

モロ（諸臣）人たちは相談しまして、妹君のヤマトヒメに祈ってもらう事にしました。ヤマトヒメはタカミヤ（三重県松阪市山添町、神山神社）にてミツエシロの見習いに入っておられました。ヤマトヒメは、タカミヤで𠂤冉（カヰ・カユ・粥）をもって祈りました。（ホ36-23）　それで、

𠂤冉田となり、漢字時代の後には飯野という地名になったのでした。

36-9　さて、カンナ（10月）8日の事でした、トノ（皇居）に立ったホンツワケは、ククヒ（水鳥のようです。　サギか？　コウノトリか？）の飛ぶのを見て「なにものや」と、初めて言葉を発するのでした。キミ（イクメさん、垂仁天皇）はお喜びになって「たれか此のトリ（鳥）を捕り得んや」とおっしゃいますのでした。ユカワタナという人物が言います。「トミ（わたくし）が捕り得てみましょう」と。キミは「捕り得ば、褒めん」と約束なさいます。

36-11　ユカワタナは、飛び行くククヒを追い訪ねてタシマ（但馬）を経てイツモ（出雲）のウヤヱ（荒神谷遺跡のところ、簸川郡斐川村宇屋神庭、神代神社の付近か。銅剣358本の荒神谷遺跡の近く。宍道に近い）にて捕り得たのでした。ネツキ（11月）2日にククヒをホンツワケのミコに奉りました。ホンツワケさんは、ククヒを弄（もてあそん）で言葉が言えるようになるのでした。イクメのキミは、ユカワタナを褒めて「トリトリヘ（鳥取部）」のカハネ（姓）を下賜なさいました。

36-13　25年（アスス713年）キサラギ（2月）8日にイクメのキミ（垂仁天皇）はミコトノリを出されます。タケヌガワケのミコと、クニフク（5代カヱシネ（考昭天皇）のミコのカスガヲキミの子孫）と、ミカサカシマ（オオカシマ・カスガ）と、トイチネと、タケヒ（オオトモ）達を始めとして多くの諸臣を前にしておっしゃいます。

36-14　「わがミヲヤ（ご先祖）のことを思います。特に先代のミマキ（崇神天皇）のキミはサトク（聡い）してホツマ（ニニキネさんからの尊い精神）を覚り得ておられました。　アヤマリ（錯

誤の原因）をタタシ（糺し、ただし）てヘリクタリ、カミ（祖先・伝統・精神）をアカメテ（尊ぶ）ミ（身）をコラス（凝らす）事をなさいました。

みつるナビ
Ⓜ 8代クニクル（孝元天皇）さんのおキサキのイカシコメさんがオシマコトのミコをお産みになりました。9代フトヒヒ（開化天皇）はイカシコメさんをおキサキ（正皇后）に立てられます。さすがに、一文字だけは変えてイキシコメさんとなってでした。

ハハ（義理の母）をキサキとすることは、タブーです。イセのミチに反します。ヲミケヌシがイサメますが、聞き入れられずに、おキサキさんとなられて、イキシコメさんはウチミヤに入られます。そして、ミマキイリヒコ（のちの10代ミマキのキミ（崇神天皇）が産まれます）そして、代が変って、ミマキのキミ（崇神天皇）の御代の5年に疫病が大流行します。ミマキのキミ（崇神天皇）は、ご自身の出生に関わる罪が原因であるか？　と、ツミを償う事に力を尽くされました。その結果、再び、豊かな御代になったのです。さて、イキシコメさんは、長生きをなさいます。イキシコメさんの189歳の記載がホ35‐4に記されています。

この故に、ソロ（水田の作物・畑の作物）の実りが充実して、タミ（国民）が豊かに成り得ました。

今のわが世に至りても、怠らずにカミ（祖先・伝統・精神）を祭らんとします」

36‐15　ヤヨヒ（3月）8日に、アマテルカミの祭りのミツエシロの代替わりを決められました。トヨスキヒメのご高齢による引退にあって、ヤマトヒメが2代目のミツエシロに任じられます。

さて、トヨスキヒメさんの巡り回られた箇所を説明しましょう。

トヨスキヒメさんはミマキのキミ（崇神天皇）のミコ（皇女）で、キのアラカトヘさんの娘さんのトオツアヒ・メクワシヒメが母上でした。トヨスキヒメさんは、アマテルカミのお告げをお聞きになって様々な思い出の場所を巡られました。アマテルカミのミタマケ（カタミ）をお担（かつ）ぎになりまして、ヨサ（京都府与謝郡、天橋立の宮津市の付近）に向かわれます。ハシタテ（天の橋立）とは、カサヌイの始めのお祭りの場所（三輪山麓の檜原神社か?）から上空をミヤツ（宮津）まで松に雲がたなびいて掛って伸びてきて渡しているようにも見えます。

36‐17　ミツカキ（崇神天皇、瑞垣の宮）の39年（アスス659年）ヤヨイ（3月）ミカ（3日）にミマキのキミ（崇神天皇）のミコトノリがありました。アマテルカミと、トヨケカミをお祭りするミコトノリです。

「ケクニのオトトのタケミクラ【未詳】をイワヒヌシとします。ヒコイマスの子のタニハミチヌシをミケノモリに任じます。アメのヒオキはカンヌシです。フリタマはネギに任じます。

トヨケカミと、アマテルカミを祭るべし」

タニハミニヌシはミケのカンメクミでした。ヨキミコ得たり。（ミツエシロとしてのトヨスキヒメのこと）

36‐19　トヨスキヒメは、ササハタミヤ（篠畑神社、奈良県宇陀市榛原区山辺）に戻りますと、またしてもカミ（アマテルカミ）の御告げがありました。そこで、またヲヲカミ（アマテルカミ）のカタミを奉賛し戴いてアフミ（近江）からミノ（美濃）を巡り、やがてイセ（伊勢）のイヰノ（飯野、タカミヤ、三重県松阪市山添町、神山神社）のタカヒオカワにススを留められたのでした。タカミヤを、御作りになって、アマテルカミのお心をお鎮（しず）めになっておられたのでした。（この間の諸国巡幸は『倭姫命世記』に詳しい。錯誤も混入。トヨスキヒメと、ヤマトヒメのご交代時期の混乱）

36‐21　イクメのキミの（10代、垂仁天皇）22年（アスス710年）シハス（12月）28日に、ヤマトヒメ（ヨシコ）が12歳でカミにミツギのミツエシロに定まります。ワカコの親子がお供をして、ヤマトヒメをお連れしてきました。ウスメ（若い女性）がみクシ（櫛）をアクル（上げる）との、クシタ（櫛田川）に落とす、クシタカワ（櫛田川、櫛田神社、松阪市櫛田町）に、年を越しまして、新年の元旦のハツヒ（初日）の出で立つのと共に、アケノハラ（明野）のイセのタカミヤに入られるのでした。

オハ（伯母さん）のトヨスキヒメに見習いをして、アマテルカミのミタマにお仕えします。

36-23　23年（アスス711年）ナツキ（9月）に、①丹（カヰ・カユ・粥）をもって兄のホンツワケさんの言葉のしゃべれない障害の治癒を祈ります。

36-23　三年の見習いの後、25年（アスス713年）、トヨスキヒメは103歳の高齢でヤマトヒメ（ヨシコ）にミツエシロを任せることになりました。ヤマトヒメさんは、ウチ（アマテルカミのウチミヤ）のヲミコ、つまりミツエシロです。ヤマトヒメは、ミタマケを担（かつ）いでイヰノ（飯野、タカミヤ、神山神社）からイソヘ（イソミヤ、磯神社か？　伊勢市磯町。　あるいは、伊蘇上神社、三重県多気郡多気町大字相可。か？）にお移ししてお鎮めしてお祭りします。

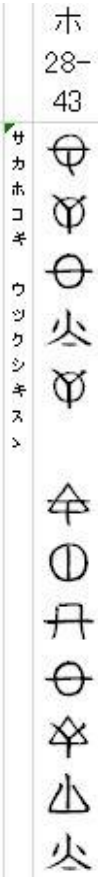
そうしていましたら、「良きミヤトコロが⊖（サ、南）にあります」と伝わってきましたので、ワカコを遣（つか）わしました。（イソミヤ、磯神社　伊勢市磯町だと⊖（南）になる。

36-25　ワカコがヰススカワ（ヰソススカワ、五十鈴川）に至りますと、サルタヒコ（恐らくはミタマ）が告げるのでした。すでに、フモヤヨロホ（208万歳）に至り来ていましたサルタヒコは、ワカコに言うのでした。

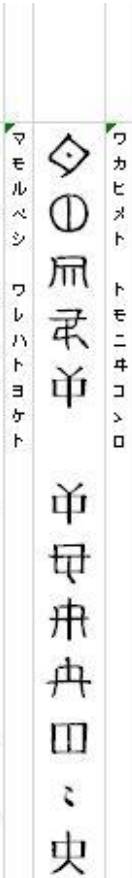
「われ昔、カミ（アマテルカミ）からの賜り物をサコクシロのウチミヤ（アマテルカミの晩年のご座所、伊勢・内宮）に入れて、アラミタマ、ヤヨロホ（八万年）待ちましたのでした。【詳細は未詳】このカンタカラは、アマツヒツキのサカホコキと、ウツクシキ・ススと、ワイキ・タチ（ツルギ）の三品です。アマテルカミから申し渡されていました。「カカン・ノン・テン時待ちて、必要とならばミチを表せ」と、です。このオホロケ（簡単ではない）のモノでは有りません事から、「コ（亡くなる）」にも得ずにして、ここに、お渡しするべきヌシをお待ち申しておりました」

（アマテルカミのご違勅は、ホ28-43）

ホ28-43



ホ28-44



サルタヒコは、ワカコに三種のカンタカラを渡して、更に言います。

「ナカタ産まれのツチキミ（謙（へりく）だった言い方）は、モトに帰らん。

このカンタカラを持ち帰り、そのように、告げよ」
と言ってサルタヒコは去って行きました。（また、去った）
父のオオワカコは、戻って報告します。ヤマトヒメは、早速にウチ（内宮の場所）に至りまして見てみます。そしておっしゃいます。
「これは由来も深きカンカセのイセのミヤです。ミクサは、祭るみなもとです。さらに、イヤマヒ（尊敬）をアマテルカミのご存命の時代にまで遡るアクライシもここに有ります」
ヤマトヒメは、ウチのミヤ（内宮）の再建の場所をここに定められたのでした。ヤマトヒメは、オオハタヌシや随身のヤソ（８０）の供の人達に、ヰソススハラのクサ（草）を刈らせて、近遠の木を斬らせます。モト（元）、スエ（末）もとし（逆にして）マナカをもちてオオミヤハシラを敷き立てます。チギ（千木）をタカ（春と秋）し（為す）りて、ミヤが成ります。
36-32 そこで、ミカト（皇居）のイクメのキミに報告します。イクメのキミ（垂仁天皇）はミコトノリして仰いますのでした。
「ミカサのヲトト（ミカサ・カシマ、ヲヲカシマ）をイワイヌシにします。
ワタラヒトミは、カンヌシにします。
アヘ・タケヌガをミカワリ（私の代理）にします。
ワニ・クニフクをウチカワリ（皇后の代理）にします。
モノヘ・トチネをミウエカラ（皇太后の代理）にします。
タケヒ・アサトをミコカワリ（皇太子の代理）にします。
おのおの、詣でて下さい」
36-34 ２６年（アスス７１４年）ナツキ（９月）１６日にヲヲンカミ（アマテルカミ）のお遷しが執り行われます。５０本目のマサカキの樹が自ずと生えたヰソススカワのサコクシロのウチのミヤ（伊勢神宮・内宮）にわたましがおこなれ、１７日の夜にミタケハシラ（真の御柱）を納め為（し）むるのでした。これ、ミタケハシラとは、スヘラギ（天皇陛下）のおん親（みず）からのタケ（身長）を計り写して作るものです。それは、ミヤコ（皇居）にてソロ（水田の作物・畑の作物）の順調な成長を祈り、雨風やノフシ（台風）の程が良くて豊かになれと、臥して澄みてイヤマヒ（敬って）てノト（祝詞、祈りの言葉）を申すみ恵みに通じるのです。
36-36 カミ（アマテルカミ）も、ここにお喜びでして告げておっしゃいますのでした。
「むかし、吾が住むサコクシロの、しきなみよするイセのミヤ、ここに長くしつまり、守るべし。トヨケのカミと、もろ共そ」
アマテルカミのお告げを、ヤマトヒメからイクメのキミに言上しましたら、キミはお喜びでして早速にトヨケのカミの鎮（しず）もりますアメのマナヰ（京都府京丹後市、比沼真名井神社）にニキテを持ちてサオシカ（勅使）を派遣なさいます。トヨケのカミをイセにお遷し申し上げるためです。サオシカには、ミワのミケモチと、イワヒト（祝い人）として、タニハミチウシ（タニハミチヌシ）が使者になりました。

・

クニヌシ（アメのマナヰのところのオサか？　に伝わる古伝）のカミの教えは、次のようです。
ヲヲンカミ（アマテルカミ）は継ぎ（世継の子を得ること）を、おほして（願われて）イセのミチをお教えになりました。ヤモのヒトクサ（多くの全国民）をイケ（活かして）恵むものですから、カツヲキはヤキ（８本）です。チキはウチ（内）を削（そ）ぐのでウチミヤと言います。ウチ（内）軽くして、タミを豊かにと願うからの故です。
トヨケカミの方は、サカホコのノリを強調なさいました。アメのホシのコクラ（九星、中心とトホカミヱヒタメ）を表すのでカツヲキはコキ（９本）です。チキは、ト（外）を削ぐのでトミヤ（外

宮）です。ウチ（内）を篤（あつ）くイツ（心をしっかりさせる）のタミのチチ（国民の全体の父親）の役割です。畏れ、ミチを学び得るようにしなさい。

ウチミヤ（内宮）は、母親が子供を恵み愛しむような役割の、キミ（天皇陛下）が国民を愛しみ恵むノリ（定め・役割・精神）なのです。